セッションNo.7の発表に対するコメント

矢島道彦

一、藤井隆道氏の発表「古典インド思想における言葉と人間」について

古典インド思想における人間論を主題とするなかで、とくに「言葉」を取り上げたのが藤井氏の「古典インド思想における言葉と人間」である。とくに言葉と意味に関するニヤーヤとミーマーンサー両派における態度の違いについて、藤井氏はきわめて簡潔にしかも平明に説明してくれた。「平明」というのは、難解なはずの領域の研究でありながら、しかも読み手として全くの素人である私にすら、充分にわかる言葉で藤井氏が語ってくれたことへの感謝を込めた賛辞である。

古いヴェーダ文献は、補助文献を除いて、すべて神の啓示による天啓文学（シュルティ）とみなされ、これに対して聖者が創作した聖伝文学（スムリティ）と区別されることは周知の通りであるが、藤井氏は右のようにニヤーヤとミーマーンサー両派の相違点を本論のなかで明確にしてから、最後に「付論」として「ダルマキールティ：人が語ったのでなければ、言葉は無意味である」という一節を追加して、法称のヴェーダ批判についても紹介してくれた。この付論のなかで、ミーマーンサーの一方の好敵手であった法称の見解を対比させたことによって、言葉と意味に関する仏教の立場をいよいよ浮き彫りにし、本セッションを大会テーマに相応しい充実したものにしたと思

われる。

二、一色大悟氏の発表「近代日本の縁起解釈論争にみる人間観——説一切有部の三世両重縁起説をめぐって——」について

一色氏の発表については、そのタイトルをみて、おそらく部派やアビダルマの研究を専門とされる氏の自身の立場から、大会テーマに相応しい縁起解釈として木村泰賢の縁起解釈に焦点を当てて考えたい、あるいはより積極的に、むしろ木村寄りの再評価を企てたい、といった意図をもっての発表かと勝手に想像した。しかし実際は、木村泰賢だけでなく、当時の代表的な論者たちの議論を取り上げて比較考察することを通して、それらを新たな視点からとらえるというものであった。

大正末から昭和初期の縁起論争について、その代表的な論者といえば、たしかに一色氏が取り上げた木村泰賢・宇井伯寿・赤沼智善・和辻哲郎の四氏であることに異論はないだろう。かれらを中心として展開された論争について、一色氏は「そもそもかれらの縁起論争は何だったのか」というところから問い直している。そして、日本の仏教学界において、かれら四氏の著作がもっぱら文献学的な原始仏教研究の先駆としてのみ扱われてきて、著作それ自体は研究対象とはみなされていないという。「著作それ自体」とはいかなる意味か。一色氏いわく、「木村ら自身の発言を参照すれば、縁起論争は仏陀あるいは初期経典の縁起説を単に文献学が客観的に研究する途上で起こった確執といった表現には収まらない、別の側面を持っていたことがわかる」。こうして氏は自らの関心が旧来の文献学的な研究を超えたところにあることを明言してから、興味深い議論を展開させていった。

木村泰賢は『原始仏教思想論』の序文で、自らの著作を「新しい形成における一種の阿毘達磨論書」であるとまでいい、経典の意味を紙面に現われない「裏面的意義で推しつめようとしたもの」と表現し、加えてその執筆の動

機として、「混濁せる大乗宗教を洗浄する標準を確かむる」ための「原始仏教主義」を提唱することを掲げたと、一色氏によって木村の主張が紹介されると、なるほど木村の『思想論』が単なる文献学的な研究ではなく、ある種強烈な宗教的意図をもって書かれていたことに改めて気づかされる。若手の文献学者である一色氏が、ここでは氏自身の文献学的な成果の公表という目的を捨てておいて、大会テーマに沿って縁起説に関する論争史のなかに「人間」を見出そうとして、木村らの縁起論争を先行研究としてではなく、研究対象そのものとすることを宣言した。一色氏の論考は、要するに木村らの縁起論のなかに「人間」を問う新たな意欲的な取り組みである。

本大会の趣旨である「「人間」定義の新次元」の探究の一助として、一色氏が縁起解釈をめぐって戦わされた木村ら近代の代表的仏教学者の間の思想論争を好個の材料として持ち出したのは、それ自体が卓見であり、とくに木村と宇井の縁起解釈の特徴を『倶舎論』・姉崎の解釈との比較によって明らかにしようとした点は非常に興味深い。そしてその「検証」を通じて示し得たことは、一色氏自身の言葉でいえば、「木村ら四者がいずれも初期経典に見られる十二縁起を対象としながら、各人各様の人間観を込めた解釈を与えていること、その人間観は仏教観と表裏一体にあること」であった。

思うに、発表を通じて一色氏がこのような指摘をされたことは重要であるが、一方では、冒頭の「問題の所在」において触れられている「仏教の有効性」や「仏教の正当性」の問い直しについて、より踏み込んだ議論を求めることは無理だったのか。論文の末尾で「人間の定義の更新は仏教の更新と軌を一にする可能性がある」といい、「したがって仏教の側から新次元の人間観を提示しようとする活動は、仏教自身の再解釈と無関係ではないかもしれない。そこで宗教伝統がどのように継承され、学術的に語られるのか、発表者の関心を引いてやまず、またそれ自体が仏教研究の対象となりうるように思われる」と結ばれているが、ならば仏教の側から新次元の人間観を提示するために、一色氏自身の縁起解釈も示してほしかったように思う。

仏教の縁起論には、がんらい胎生学的な解釈などが入り込む余地は全くなかったと考えるが、三世両重の縁起解釈への批判は昔から枚挙にいとまがなく、そのスタンスも色々で、ひとまとめにはできないだろう。現代のインド学や仏教学の研究者のなかには、たとえば森章司氏（ネット文書⑫「死後・輪廻はあるのか――「無記」「十二縁起」「無我」の再考――」二〇〇四年十一月六日）のように、三世両重のような縁起解釈が正しくなければ、葬送儀礼が成り立たないではないかといったある種の危惧を表明する人もいる。輪廻や輪廻我が実体的に勝義において存在することを認めなければ、仏教的な葬送儀礼が成り立ち得ないのか、そんなことはないと筆者は思っているが、ここではおいておこう。仏教の救済論として、輪廻の思想が不可欠なものとは私には思われないし、ブッダ自身、そうした（輪廻に）限定した形では、苦しみからの解放について語りたくなかったのではないかと想像している。これがジャイナ教ならば、「われわれはアートマ・ヴァーディン（ātmavādin）であり、ローカ・ヴァーディン（lokavādin）である」と当初から公言してはばからなかったが、仏教とはその点でスタンスが決定的に異なっている。

縁起解釈の現代における有効・有用なあり方といえば、文献学的な正当性はともかくとして、現代のエコロジーの思想運動の深まりとともに、一つの妥当な解釈の方向性は見えてきたといえるかもしれない。たとえばジョアンナ・メイシーなどの縁起論などは、筆者にはそのようなものに映っている（かつて環境関連の市民運動に身を投じたときに、私はメイシーの縁起思想に出会って感銘を覚えた）。今後一色氏自身がどのような自らの縁起理解をわれわれに示してくれるか、楽しみである。

三、山畑倫志氏の発表「ジャイナ教聖者伝の展開と人間観の変容」について

山畑氏の発表論文は、ジャイナ教のいわゆる聖者伝の歴史的変容に関わる論考である。発表のタイトルにジャイナ教や祖師伝などの文字があるのをみて、気安くコメンテーター役を引き受けてしまったことをじつは大変後悔している。氏の専門領域は大変広いようであり、言語についてもアパブランシャや古グジャラティーから近代諸語に至るまでインドの言語史を広くおさえた上で研究を進めておられるようである。

要旨をみて訊きたいと思ったことの一つが、氏のいう「二種類の（ジャイナ教）聖者伝」についてである。これが論文のなかでどのようにクリアーな形で提示されるのか、興味を抱いた。またこれに関連して、多種多様なジャイナ教の聖者伝文学を、氏はあえて十二―十三世紀を境に二種類に分けるという。その理由や意味について山畑氏がどのように述べるかにも興味を持った。

山畑氏は「古典的聖者伝」というものを想定し、どうやらその最後はヘーマチャンドラの六十三偉人伝（トリシャスティ）ということになるらしい。その特徴として、古典的な文語としての性質が強く、地域性が強く出ているわけではないとしている。それまでの聖者伝は、いわばトリシャスティに向かって、分量が長大になるとともに、形式も洗練されていくとし、「特にアパブランシャの聖者伝にサンディ、バンダの形式が広く用いられた」としておられる。

インド文学の「多様性」ということを考えると、とくに言語や宗教の多様性がその多様性を生んだと以前からいわれている。そうした多様性のなかにあって、ジャイナ教の聖者伝にも歴史的に明確な変化がみられるというのは、おそらく山畑氏のユニークな見方であり、注目されてよいであろう。インドの言語史の上では、プラークリット諸

語の時代を経て、さらにアパブランシャの段階を経て、徐々に近代語の特徴をそなえたものとなっていく。それが十世紀頃かとされているわけであるが、おそらくそうしたインドの言語史の大枠との関係については今後より詳しく検討されていくであろう。

山畑氏は論文のなかで、ジャイナ教の聖者伝の変容に関して、とくに十二世紀以降、インド西部で発展したラーソー文学について詳しく取り扱ってくれた。とくに注目すべきは、文学作品にみられる傾向の変化を政治状況の変化と突き合わせて、「聖者伝文学の形式がラーソーに置き換わる時期とチャウルキヤ朝が政治的な基盤を失っていく時期とが概ね一致する」と指摘している点である。わかりやすい図式化も行っており、説得力がある。またグジャラート及びラージャスターン両州を含む地域に数多くのジャイナ教の聖地が造営され、それらの聖地を紹介する「聖地型」のラーソー文学も生み出されていった点を指摘する。このように氏が聖者伝の変容の問題を、社会的・政治的な状況も踏まえて考察を行い、その関連性を納得のいく形で提示し得たことは大きな成果であろう。

ジャイナ教における聖地の造営は、聖者の伝記文献、とくにサマヴァサラナと呼ばれる祖師たちの説法の情景描写との関係が明らかであり、また関連する図像や儀礼などもきわめて重要であると思われるので、そのような観点からの考察も今後視野に入れて進めていただきたい。